

E・ベルツの「憑依と類似状態について」

安井 広

この「憑依と類似状態について」“Über Besessenheit und verwandte Zustände”はベルツが日本滞在を終えてドイツに帰った翌年、一九〇六年（明治三九）九月 Stuttgart の第七八回ドイツ自然科学者医学者集会でおこなった講演の内容を Wiener med. Wtschrift 一九〇七年四—五月（一八一—二二号）に連載したものである。

ベルツは一八八五年（明治一八）一月二六、二七日の官報四六九、四七〇号に「狐憑病説」を載せているが、また O・A・G（ドイツ東洋文化研究協会）で憑依と宗教的妄想に関して四回講演したことが記録されている。⁽¹⁾

- (1) “Über vom Teufel Besessene” 「悪魔による憑依について」 1881年（明治14） 2月12日
- (2) “Über religiösen Wahnsinn in Japan” 「日本における宗教的妄想について」 1881年7月6日
- (3) “Über die Togami-Sekte und über religiöse Ekstase in Japan” 「Togami-Sekte と日本における宗教的エクスターゼについて」 1888年（明治21） 2月29日
- (4) “Besessenheit, religiöse Ekstase und Verwandtes in Japan” 「日本における憑依、宗教的エクスターゼと類似状態について」 1897年（明治30） 2月24日

それらを発表したあとで、さらに憑依のことをとりあげたのは、たまたま一九〇六年アメリカで出版された J. Jasnoff の “Subconscious” を読んで、憑依のメカニズムを説く上に重要な示唆を得たことが考えられる。また文中にも再三指摘

しているように当時ドイツにおける医学者の精神医学に対する関心がうすく、フランスその他の国に遅れていることを警告することも考えの中にあつたのであらう。

ベルツの精神医学への関与は一八七九年（明治一二）はじめて東京大学医学部に精神病学の講座が設置された時、内科教授であつたかれが兼ねてこれを担当し、専任の榊教授が帰朝して着任する一八八六年（明治一九）一月まで担当していた。つぎに一八九四年（明治二七）東京における地震にさいして自己の体験に基づく論文“Über Emotionslähmung”「情動麻痺について」（一九〇一年）がある。第三に憑依に関する研究が挙げられる。内村はベルツは若い時から精神現象に大きな興味を抱いていたらしく、またこまやかな心理描写のできる人であつたとして、彼の多くの業績の中でとくに精神医学におけるそれを高く評価すべきであると強調している。⁽³⁾

現代医学では憑依状態と憑依性精神病とは区別すべきものとしてゐるが、岡田は従来日本でいわれていた狐憑病をさまざまな精神疾患に見られる動物憑きものあるいは動物変形妄想の一つであるとして狐憑病とせず狐憑症の名を用いてゐる。⁽⁴⁾

以下ベルツの述べるところを摘記する。

人が病氣になつたり精神障害を来したりした場合、それを悪魔がわざわいしたり、悪魔が体内にはいつて人を苦しめるためとするような考えは昔から世界各地に見られた。また人の死後靈魂が肉体を離れて別の人につくという考えもひろくおこなわれた。こうした迷信が暗示となつて、被暗示性の強い、主として女性、とくにヒステリー傾向の強い女性をとりえて憑依妄想を起こさすようになる。

また麻酔薬を用いたり、あるいは催眠術を実施することにより、被暗示性にうったえて人をエクスタシー状態にみちびいたり、あるいは妄想を起こさすこともできる。

極端な自己暗示によつて、人はキリストの受難をみずから体験し、神に近づくといい妄想を抱くようになる。十字架に

釘づけにされて手足から出血し、処刑刀で脇腹を刺されて「聖痕」Stigma を受ける。しかも苦行を経験することは恩恵を受けることとして幸福に思い、神秘主義者の言を借りれば一種の「肉感的痛み」“Wollüstige Schmerzen”を覚えるという。ヨーロッパでは宗教的エクスターゼが集団的に起こる例は多く、いくつかあげてあるが、最も有名な一七三〇年パリの聖メダル Meckard 教会墓地に起こった流行の例では痙攣、舞踏病、色情的暗示、幻想、予言、聖痕印刻、自虐、肉を裂くというようなあらゆる種類のエクスターゼの形が見られた。

サタンはとくに敬虔な処女を偏愛し、醜行をほしのままにし、修道院の尼僧のあいだに宗教的エクスターゼの流行は数多く見られた。その原因はかの女らが宗教上、社会上孤立した特殊集団の共同生活を営み、被暗示性が異常に高まっているためである。一六三二—三四年にフランスのルーダン London の修道院でグランディエ Grandier という牧師が美貌とたくみな誘惑によって尼僧院長をはじめ全修道女を狂わせ、愛におぼれさせてしまった。グランディエはのちかの女らによって告訴され、火刑に処せられることになるが、尼僧たちはグランディエの名を聞くだけで異常な興奮を覚えるのに、グランディエの顔を見た者はなく、ただ名前と評判で知るだけだったという。

一八七七年(明治一〇)⁽⁶⁾ベルツは日本に來た翌年、日蓮宗の法会を営む一月二三日に身延へ行き、信徒のこれに類する宗教的エクスターゼを見て、仁王門の前の広場の祈禱の様子を詳細に描写している。

かれらは膝まずいて合掌し、怒れる偶像(仁王)を見ながら数時間木のばちの拍子に合わせて宗派の祈りの文句「ナムミョーホーレンゲキョー」と、時にはかすかに、時には大声で、あるいはより高く、あるいはより低く、ある時は歌うように、ある時は話すように、しかしいつもきちっと拍子をとってくり返す(中略)ひとりの婦人の目や口が攣縮しはじめた。もう一人の婦人は拍子にあわせてうなずいたり、頭を左右にゆり動かす。また両手をあげたりさげたりする者もいれば、体をぶるぶるふるわす者もいる。祈禱の先唱者のたたく太鼓の音はだんだん高く、声はより高く、動きはますますはげしくなり、祈りの文句は口でしゃべるといふより、わめくようでシュッシュッ言い、顔はゆがみ、体ははげ

しく前後左右に大きく曲げ、頭は肩からとび去ろうとしているようにゆれ、両腕は空中に投げられ、髪ははげしい運動のためばらばらにほぐれ、乱れてまわりに波打つ。その顔には狂った絶望による深い心の悩みがあらわれている。ある者はじっと見すえ、口はピクピク攣縮して泡を吹いている。着物を体から引きはなすようにひっぱる女もいれば、かなきり声を発し、顔や胸をかき破り、髪をひきむしり、時々痙攣にふるえたり、はげしく痛むように上体をねじったり伸ばしたり、そうかと思うと体を弓のようにうしろへそらして頭が地につくまで曲げたり、疲れた様子も見せず、どこにそんな力があるのか全身を十回も百回もくり返し高く飛びはねる。

ベルツはこの群集の中から一人の女性に信仰の動機や祈禱の時の心境をきく機会を得た。二二歳の横浜から来た娘である。かの女は父の死に遭って、思いがけぬ遺産を得たため遊惰の生活にふけた。一年後かの女は結核にかかり、医者に見はなされて思い悩んだあげく信仰生活にはいった。八カ月のち健康は回復し、ベルツは胸を診察しているが、肺結核のあとほとんど見つからなかった。僧やほかの巡礼者たちはかの女は祈禱によって治癒したのだと言ったが、かの女自身は森の谷のよい空気と規則正しい生活が祈禱とともに大きく治癒に寄与したのだらうと言った。エクスターゼ状態についてかの女は語った。

初めてお寺の景色を見た時、わたしはこわくなって、このこわさは長い間続き、いらいらするようになりました。……だんだんほかの人たちの気持ちちがわたしに伝わって来ました。荒々しく激動して悔恨した方が祈禱にはきくとわたしに言いました。それでわたしはそういう状態にならうと努めました。またつぎのようなことがおこりました。わたしが恐ろしい大きな仏さまのお顔を見ていると、わたしは不安がつのつてきました。荒々しい怒った目がわたしの方に向いているだけでなく、わたしの体の中にはいって、わたしの心の底を読んでいるように思われました。わたしの悩みと不安は増し、もっと声をはりあげて祈りました。わたしは叫んで、着物を裂いたり髪をつかんだりしました。わたしの体の

中に何か獣のようなものが行き来していました。何か重いものがわたしの胸をおさえつけました。そのあとわたしは何も覚えていませんが、最後に一びきの蛇が口から出て行ったような気がしました。気がついたらお寺の庭に寝ていました。何回も御祈禱の仲間入りをするようになってひきつけは軽くなり、こわいことも苦しいこともだんだんなくなりました。とうとうわたしが前に頭がはつきりしていたころのものをほとんど失っているのに気がつきました。

日本における宗教的エクスターゼのこれらの状況がヨーロッパに見られるものと本質的に同じであることは言うまでもない。宗教的エクスターゼ、憑依は東アジアにひろく分布しているが、ヨーロッパとは様相がいちじるしく異なる。東アジアには憑依の感染による流行はほとんどなく、患者は孤立性に散発し、またヨーロッパにおけるような色情やヒステリックな要素はうすい。また東アジアには悪魔というものは知られていない。そのためここでは悪事を働くのは悪魔ではなくていろいろの動物である。動物の種類は土地により、国によって異なるが、日本では狐がとくに多く、狐が人の体内に住むとされる。つぎにベルツが大学病院で四週間受け持った狐憑症の例をあげる。

四七歳女性 裕福な農家の妻で身体的には健康、遺伝疾患はないがあまり賢くはない。八年前かの女は数人の友だちといっしょにいた時、一人が、村で狐が追いだされていま新しい隠れ家を探しているという話をした。……この話が農婦の頭の中を行き来していたちよūdそその晩、思いがけず誰かが家の戸をあけた。その時かの女は左の胸を突きさされたような気がした。これが狐だった。この瞬間からかの女はとり憑かれてしまった。初めはこのひそかな客は時々かの女の胸の中で動いたり頭へのぼったり、口を通してかの女の考えを批評したりからかったりするだけで満足していたが、しだいに厚かましくなり、すべての話に割りこんで来て、おかしいことや野卑なことを言い、居合わせた人をのしつたりしてこの女をいじめた。かの女は法印（山伏）などに治療を頼んだがむだだった。……ほとんど全財産を使い果たし

ていた。

かの女が目には涙をうかべて苦痛の経過を物語った時狐が出て来た。最初に軽い、それから比較的強い攣縮が左の口のまわりと左腕にあらわれた。かの女は右のこぶしでくり返しはげしく左の胸をたたいた。この胸はこの病気になったはじめからはれて血がにじんでいた。そしてわたしに言った。「あッ先生、いままたわたしの胸のところで動くのです」と突然かの女の口からべつの鋭い声が強くひびくような調子で言った。「ああもち論おれはそこにいるさ、おまえのようなばかがおれを邪魔できると思っているのかい」それから女はわれわれに言った「ああ神様許してください、わたしにはどうすることもできません」と。それから何度も胸を打ち、顔の左側をピクピクさせながら狐に「静かにしないで。あなたは先生の前で恥ずかしくないの」狐「へへへ 恥ずかしいだって、なぜさ、おれだってこれが医者だぐらいのことはわかっているさ、おれが恥ずかしいとすればこんなとんな女を住み家にえらんだことだね」その女は狐をおどかし、静かにするよう呪文を唱えた。狐はかの女をさえぎってすぐに考えることも独占してしまった。狐は理解したい機智ですべての問いに答え、何をきかれてもすぐに説明できるよう用意していた。女は今や自動機械のように受動的で、人がかの女に言うことは明らかにもう何も理解できないらしく、かの女に何か言うと狐がいつもかの女のかわりにいじわるく応答した。体の左側の感覚は右より弱いらしい。しかしこれは攣縮のため確認しがたい。麻痺はいつも起こるわけではない。発作の高まった時は攣縮は弱まり、左の腕はたるんでいる時も緊張している時もあって、反射の強さは一定していない。顔の左側をつまんでも反応はほとんどないが、右をつまむと痛そうに攣縮する。一〇分後狐の話し方は不明瞭になり、その間に女はだんだん二、三ことばを発することができ、狐を非難するようになる。しばらくするとかの女は全く正常になる。かの女は発作のはじめの過程を正確に記憶しているが、狐に占拠されている時のことについては正確な報告ができなかった。しかしかの女にその話の本質的な内容はわかっていった。かの女は狐がいまわしい挙動をしたことをわかったから許してくれと泣きながら乞うた。……このような発作が日に六回から一〇回

あるいはそれ以上起こる。眠っている時発作は起こらないが起こりそうになると目がさめる。

わたしは患者をガラスの壁のあるへやへ連れさせ、いつでもかの女に気づかれることなく観察することができた。その経過はいつも同じようであったが、はげしいこともあり、軽いこともある。また時には長く、時には短かった。またかの女は一人でいても発作は起こり、攣縮があって、左の胸をたたき、それから宿主と客との熱っぽい対話にはいった。精神的興奮たとえば医師が訪ねて行ったりすると発作は容易に起きた。

前にも言ったように女が知識、教育その他の状態が低い点から見て、多弁、機智、狐が日常患者に遠隔操作で話させることばの皮肉は驚くべきものであった。

ある時わたしは患者に麻酔をかけた。……二人の自我の間の争いは意識脱失の始まるまで続いた。しかし最後には狐だけがしゃべった。そして患者がわれにかえった時、最初にしゃべり、患者を操作するやり方がわるいと訴えたのは狐であった。それ以上麻酔をくり返すことは患者から拒否された。

わたしは口頭で話したり、他の暗示、催眠術、電気療法などを試みたが治癒するに至らなかった。……発作と発作の間はかの女は内気ではあったが理性的だった。かの女の記憶は本質的にはおかされることなく、退化は認められなかった。かの女がその後どうなったかは知らない。

憑依における精神活動のメカニズムを説くのにベルツは左右脳半球がそれぞれ独自に機能を営むとする考えをすでに『狐憑病説』で述べたが、ここでもこの考えを述べた。これが受け入れられなかったことに不満をもらし、J. Jastrow の“Subconscious”に引用される交代性人格 *alternierende Persönlichkeit* の若者の例をあげ、その男の右側が局部的知覚脱失と麻痺におそわれるたばにかれは粗野な放浪者となり、病状が左側に移ると礼儀正しい人となった例に類似すると述べている。

終わりに脳がエネルギーを多量に貯蔵する発電所にとえられるとし、

健康状態ではエネルギーは最少の消費で最高の成果を得るよう、知覚、運動、分泌、内臓、精神への通路へ流れる。したがってそれはよい動力学と静力学を構成しているわけである。多くの病気の時、この調和、動力学の障害が起こってくる。それぞれの部位にエネルギーが不足すると知覚脱失、麻痺、機能減退が起こる。一方では力が強すぎて機能が増進したり、微細になりすぎたり、あるいは負荷が強すぎたり、種々の通路のあいだの短絡により放出が粗暴無秩序のものとなる。運動領域ではそれは悪寒戦慄、痙攣、無意識運動、衝動行為となり、精神領域ではうわごと、錯覚、はげしい感動、誤った判断などとなる。

このように脳におけるエネルギー分布の均衡が破れた時、種々の知覚、運動、さらに精神活動が障害されると説いている。

注

- (1) Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Heft 3~6
- (2) Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie u. Psychiatrisch-gerichtliche Medicin, Band 58, Heft 4, 1901
- (3) 内村祐之「ベルツ生誕一二三回記念講演会」診断と治療 60—5 昭47・5
- (4) 岡田靖雄「狐憑症研究小史」日本医史学雑誌 29—2 昭58・4
- (5) この年次は『内科病論』中篇 第四版 明治22・3による。